

[シンポジウム3]

済生学舎と野口英世

森田 鉄平

公益財団法人野口英世記念会

明治29(1896)年9月、医術開業試験の受験を目指して上京した野口英世は、翌月前期試験に合格した。後期試験に備えて済生学舎に入学することを決心した英世は、明治30(1897)年3月31日に、小林榮先生に宛てたハガキ¹⁾で「小生も愈々明日即ち四月一日より済生学舎へ入学致し申候間、乍他事御放念被下度候願上候」と書いた。

次いで4月19日付の小林先生への手紙¹⁾では、「小生、四月一日より入舎いたし、爾来油断なく勉強仕居申候間、何卒、御高慮御休免被下度候」と現況を報告するとともに、「済生学舎は、設立既に星霜を遡ること二十数余、舎長は長谷川泰とて越後の産、目下籍を東京に置き、有力なる代議士に御座候。年齒は五十七、八ならむ、短軀髯少、扁面なる老書生、元とは、大学南校の塾監督の任に在り」に始まり、長谷川泰について紹介するとともに、在校生の資質について言及し、さらに「講堂は后期に属するもの四棟、前期に属するもの一棟、舎長の家一棟、病院病室各一棟、事務所一棟有之候」と学舎の構成を説明している。授業時間は「毎日午前五時より(実際は六時)午後七時迄引続きに御座候」という変則的なものだった。

明治30(1897)年11月、英世は医術開業試験後期試験に合格した。同月19日に小林先生に宛てたハガキ¹⁾で、「小生実地試験の儀、本月十五、十六の両日に御座候。受験人は吾組は五十余名(何れも学説及第者)、其内及第者は僅に九名に御座候。然るに小生儀、天の冥護と恩師の奨励とに力を得て、其一人と相成り申候」と報告した。

医術開業試験は、医師の主流を「漢方医」から「西洋医学医」に転換するために、明治8(1875)年に創設された制度で、受験資格を医師の指導を一定期間(前期試験は1年半、後期試験はさらに1年半)受けることとして医学教育機関に在学することが求められていないこと、試験内容が西洋医学の知識を問うものであること、および合格者に医師免許証を与えることを特徴としていた²⁾。大正5(1916)年に廃止されるまでの間、特に明治20年代から30年代の前半は、年間の受験者が毎年4~6千人、合格者が約一千人と記録されている³⁾。

済生学舎に在学中の明治30(1897)年8月、英世は左手の手術を受けた。8歳の時、16歳の時に次ぐ3度目の手術で、執刀は東京帝国大学医学部の近藤次繁助教授である。明治30(1897)年8月23日の小林先生に宛てた手紙¹⁾に「小生は、去十七日近藤医学士(助教授)の周旋によりて、大学の外科部施療患者となりて、同氏の手術を受ける為め入院仕候。手術は二十日に遂げられ目下は旧床上に平伏罷在候。気分は殆んど快復仕候」と書き、さらに同月三十一日には、手術に立ち会った友人が記録した「手術概略」を報告している¹⁾。なお近年になって、整形外科・形成外科の専門家が、英世の左手の状態及び手術の詳細を考察・解説した論文がある^{4,5)}。

済生学舎において、英世は坪井次郎の黴菌学の講義を聞いた。明治10(1877)年東京大学医学部を卒業した坪井は、緒方正規の衛生学教室の助手を務め、明治23(1890)年、ミュンヘン大学のマックス・フォン・ペッテンコーファーの下に留学した。明治27(1894)年12月に帰国、翌年5月、済生学舎の講師に就いている²⁾。英世は、坪井から最先端の細菌学の講義を聞いたことになる。

明治32(1899)年7月、坪井は京都大学医科大学(京都大学医学部)の初代学長(初代医学部長)となる。医学部長在任中の明治34(1901)年2月に附属病院長に就任した伊藤隼三の名前が、野口英

世を大正3(1914)年のノーベル生理学医学賞に推薦した推薦者リストの中にある⁶⁾。

引用文献

- 1) 財団法人野口英世記念会：野口英世生誕百三十年記念・野口英世書簡集IV，2006。
- 2) 唐沢信安：済生学舎時代の野口英世—細菌学への道程—，「済生学舎と長谷川泰—野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校—」，71-102 ページ，日本医事新報社，1996。
- 3) 橋本鉦市：近代日本における専門職と資格試験制度—医術開業試験を中心として—，教育社会学研究第51集，136-153，1992。
- 4) 平瀬雄一：「野口英世の手」に関する手の外科的一考察，形成外科，37: 339-345，1994。
- 5) 坂本和陽：野口英世博士の手の手術，整形外科，64: 1006-1010，2013。
- 6) 岡本拓司：ノーベル賞文書からみた日本の科学，1901年—1948年，(II) 生理学・医学賞（北里柴三郎から山極勝三郎まで），科学技術史，第4号，1-65，2000。